

## 江戸時代のワクチン接種

宮浦(福岡市西区)で荒物屋を営んでいた津上悦五郎が遺した、江戸時代末から明治にかけての記録『見聞略記』、文久2(1862)年の項には次の記事があります(高田重廣校注『見聞略記 幕末筑前浦商人の記録』)。

当冬、所々痘瘡(天然痘)流行い

たし、兼て植痘瘡致し居

り候わば、殊の外手軽く、

近村も飛び飛び流行いた

し申し候えども、植痘瘡

の故にや広がり申さず候

「植痘瘡」とは種痘(天然痘

ワクチンの接種)のことで、こ

の年の冬に天然痘の流行が見

られたが、種痘のおかげか蔓

延しなかったと伝えていきます。この

記述から、当時すでに浦の一商人が

種痘という医療法を認識し、その作

用を感じていたことが分かります。

当時、福岡藩では黒田長溥の治世

下(1834年家督相続)、領内で種

痘の普及が目指されました。種痘と

いえばその祖とされる秋月藩医・緒

方春朔(1748—1810)が浮か

びますが、国内で主流となっていく

のは彼が用いた人痘法(患者から採取した瘡蓋を砕いて鼻孔に付着させる)ではなく西洋由来の技術である牛痘法の方で、福岡藩でも西洋技術の導入に熱心だった藩主・長溥が登用した医師・武谷祐之(1820—1894)により牛痘の接種が広められました。

太宰府では、在村医・中川

昌沢が安政3(1856)年

に太宰府天満宮社家中の「種

痘之医」を担当することを藩

に許可されました(『太宰府

市史 通史編Ⅱ』)。中川家は

代々太宰府で医師を務める

家系で、昌沢は福岡藩の内科

医や京都の古方派医に医術

を学んだ後、太宰府に戻り村の「掛

医」として診療を行っていました

(『太宰府人物志』)。当時種痘は、地域

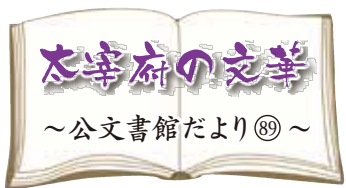
の医療を最前線で担っていた医師た

ちによっても徐々に進められ、巷で

もその効果を実感されるに至ってい

た、ということが窺えるのではない

でしょうか。



太宰府市公文書館 藤田理子